巻頭エッセイ

女子供と侮るなかれ

高松　亨
国土交通省　東北地方整備局　副局長

あるマスコミによれば、公共事業を巡るこの厳しい環境に立ち向かうために政府がとっている対抗手段の柱は、「対話型行政の推進」と「事業のスピードアップ」だそうである。いずれも、先の全総計画で提唱された「参加と連携の推進」や経済計画での「時間管理概念の導入」の文脈上にあり、これからの行政を進めるに当たっての重要なポイントだろう。

実際にはどうか。後者は、暫定断面での施設の早期供用など既に広く行われている方策を除けば、施設の供用時期の遅れが及ぼす損失をコストベネフィット分析にどう取り入れるかなどまだ試行的段階にあるように思う。前者については、確かにここ数年、各機関が広報広聴機能を重視し、積極的にPI手法を導入するなど花盛りに見える。しかし、この対話型行政にしても、まだまだ、特に国の機関についてはお上の意識が抜け切れていない印象がある。

我が東北地方整備局でもこの対話型行政の推進に力を入れている。本局だけでなく、各事務所単位で色々な工夫をしているが、昨年事務所主催のこの種の企画に参加し、女性達と子供達の立派な振る舞いを間近に見ることによって、「女子供と侮るなかれ」の感を強くした。自分自身お上意識から脱却しなければと改めて肝に命じたところである。

一つは女性達の活躍である。山形市で「山形に酒田みなとがやってくる」と言うイベントがあった。一種のポートセールスである。この企画の推進母体は「酒田おんなみなと会議」と言う団体だが、その主宰者の女性の進行によって、港町酒田の紹介、酒田港の紹介等が極めて魅力的に行われた。トークショーには自ら対岸航路を開設した酒田経済界の重鎮を引っ張り出し、酒田を利用する荷主で山形経済界のトップを務める企業家や県知事なども応援に駆けつけた。聞けば、この女性のヒューマンネットワークの成果だという。

今一つは子供達がしっかりしているという例である。秋田市であった「みなと大討論会」の提唱者は中学生達である。秋田港発祥の地土崎の中学生達が、前年の卒業研究で秋田港の活性化のために何をしたらよいかを議論し、色々な意見をまとめ、結論としては、市民皆が集まってもっと議論すべきだと提言をした。この提言を受けて地元の事務所が設営した討論会だったのだが、発表する内容やその態度、質問に答える態度など子供達の素晴らしさは、参加した10を超える団体や一般市民に共通のものとして映ったと思う。

「由らしむべし知らしむべからず」と言う言葉がある。論語の言葉だそうだが、お上意識を表す言葉として、人民はただ従わせれば良くて、政策などを教える必要はないと言う意味で理解されるのが通例だ。しかし本来の意味は、従わせることは出来るが、教えることは難しいと言う意味だそうである。確かに昔は識字率も低く、情報伝達の手段にも乏しかったので、教えることは難しかったのだろう。しかし、今や世を挙げてのIT時代であり、高学歴社会である。昔の言い訳は通用しない。むしろ我々行政側の人間が、自分達の行政意図を正しく理解し、一般に対して分かりやすく説得力を持って説明できるか、いわゆるアカウンタビィリティこそが求められていると自覚すべきだろう。

特に、技術を共通言語とする我々社会では、基本の部分はお互い分かっているはずといった暗黙の了解や、事態を説明するのに難しく言った方が格好いい等の意識がそれぞれにあるように思う。対話型行政ではそんなことでは通用しない。技術の内容をかみ砕いて説明する能力、女性や子供達も含め外部の人が何を言いたいのかをきちんと理解する能力の研鑽に勤めていきたいと思う。